

「関係形成」を育む国語科学習の展開

室 長 平岡 馨	研究協力員	山江村立山田小学校	教諭	西口 雄一郎
指導主事 岡本 美保	研究協力員	玉名市立玉名中学校	教諭	坂口 恵子
指導主事 岩本 龍二	研究協力校	山鹿市立山鹿小学校	教諭	吉良 明子
		山鹿市立山鹿中学校	教諭	水町 泰祥
		熊本県立鹿本高等学校	教諭	冨田 枝理

1 研究の視点

今回、国語科では、「関係形成を育む国語科学習の展開」のテーマの下、研究に取り組んできた。協働・協調的な学びを通して、児童生徒の関係形成を育むことが研究の目的である。

ここで、関係形成を育む学習を展開するための取組について、3つの視点から述べることとする。

(1) 視点1について

児童生徒が「なぜだろうか」と課題意識を持つことは、課題解決的な学習を行う上で当然必要となることである。言語の教科である国語科では、言葉に着目し、その言葉が持つ意味やその言葉が使われた意図などを課題とし、協働・協調的に学びながら解決を図る学習が行われるべきである。

そこで、本研究では、課題意識を持つ場面において「言葉への着目・焦点化」を、課題意識を継続して取り組むために「単元を貫く言語活動の設定」を行うこととした。これらの取組によって、課題解決的な学習過程の中で、豊かなかかわり合いのある言語活動が行われることを目指し、児童生徒の「学びを引き出す」こととした。

(2) 視点2について

学習の中で何が分かったかだけでなく、自分の考えが、なぜその考えになったのかを振り返ることは児童生徒のメタ認知を促すこととなる。そのメタ認知により、他の学習に転移できる汎用的能力として国語の力が高められる。

そこで、本研究では、一人一人が考えを持ったり、他者と協働・協調的に学んだりする場において「思考ツールの活用やワークシートの工夫」に取り組んだ。また、授業の終末場面においては、何を振り返るのが明確になるよう「振り返りの視点の提示」を行うこととした。これらの取組によって、思考過程の可視化と振り返りを行い、児童生徒の「学びを

振り返る」手立てとした。

(3) 視点3について

授業のあらゆる場面において、考えや情報を共有化したり、焦点化したりすることがある。そのことで考えを引き出したり、振り返ったりすることは児童生徒にとって理解を助ける支えとなる。

そこで、本研究では、「効果的な ICT 活用」や考えを共有化できる道具を活用し、話し合いを進める「ファシリテーターの役割」を意識させることにする。そのことにより、学びのUD化を図り、児童生徒の「学びを支える」こととした。

2 「関係形成」の検証

(1) 検証の内容

今回、国語科の授業における学習活動を通して「関係形成」を育むことを目的とする。ここで「関係形成」を本研究では次のように捉える。

「他者と多様な関係を築きながら答えを導く」合意形成・課題解決の姿

この姿について、協働・協調的な学びの中に、合意形成・課題解決を図る学習をとおした意識の変容を見取ることで「関係形成」が育まれたかを検証していくこととする。

(2) 検証の方法

合意形成・課題解決を図る学習をとおした意識の変容を見取る意識調査について、小中学校においては、「全国学力・学習状況調査」の児童生徒質問紙調査を活用し、分析することとする。高等学校では国立教育政策研究所が掲げる児童生徒の目指すべき姿を基に作成した「学習に関するアンケート」を検証授業の前後に実施し、この結果を比較・分析することで今回の研究を検証する。

これらの意識調査を検証授業の前後の2回行う。

この調査結果を比較・分析することで、今回の研究を検証する。

〈質問項目例〉
自分の課題を解決するために、積極的に友達に質問している。
話し合うことで、分からなかったことがよく分かることがある

3 研究の実際

検証 1 山鹿小学校第5学年

単元名 「広がる、つながる、わたしたちの読書」

(1) 本単元の授業設計

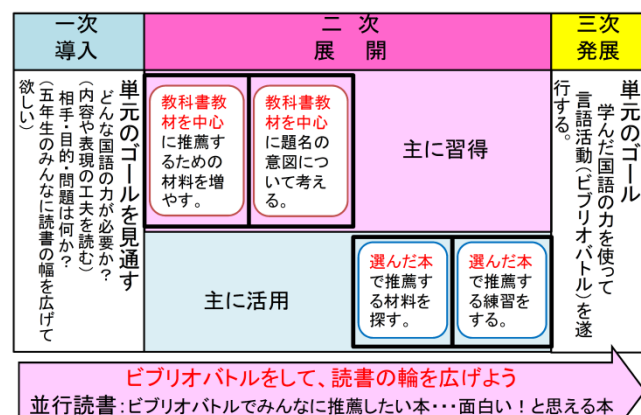
① 児童の実態から

本学級では、「自分から進んで本を読んでいる」児童が26人と半数以上おり、読書に対する意識は高いと捉える。ただ、図書室での貸し出し状況からは、総貸出冊数の約8割強が学習漫画に偏っており、活字を中心とした本へも興味を広げる必要がある。

② 学習課題の設定

本の持つおもしろさや魅力を人に薦める言語活動自体に、本の内容や表現、文章構成などの理解する力が発揮される。本の持つおもしろさや魅力を人に薦める言語活動は、まさに「読むこと」の目標の達成を目指すことができるものと考え。

③ 単元を貫く言語活動の設定と単元計画



前述①の実態を踏まえ、単元を上記のように構想した。さらに、児童同士が豊かにかかわり合えたり、主体的に教科書教材を読むことができたりすることをねらい、単元を貫く言語活動として「ビブリオバトルをして読書の輪を広げよう」を設定し、単元計画を以下の表1のように構想した。

表1 本単元の指導計画

次時	学 習 活 動	【三つの視点】との関連
1 1	○読書生活の様子から課題意識を高め、本を薦める言語活動を行うという単元の見通しを持つとともに、どのような読む力が必要かを確かめる。	【視点1】課題意識を持ち、その問題を解決するための言語活動として本を薦める単元を貫く言語活動を行う意識を高める。
2 2	○教材文「千年の釘にいどむ」から薦める材料を増やす。	【視点3】ファシリテーションスキルを意識して交流する。
3 (本時)	○教材文「千年の釘にいどむ」から筆者の立場に立って薦めるところを見直す。	【視点1】言葉への着目をさせ、筆者が題名に込めた意図を課題とする。
2 4	○「千年の釘にいどむ」の学習を想起し、自分で選んだ本で薦めるところを見つけ、それがふさわしいか班で確かめ合う。	【視点2】思考ツールを活用し、国語の力を意識できるようにする。
5	○お薦めの本を紹介する練習をし、薦める場所としてふさわしいかを振り返る。	【視点2】読書生活の課題を解決する言語活動となったか、どんな国語の力が付いたのか単元全体を通して振り返る場を設定する。
3 6	○「ビブリオバトルで読書の輪を広げよう！」という題目で本を推薦し合う活動を行う。	【視点2】読書生活の課題を解決する言語活動となったか、どんな国語の力が付いたのか単元全体を通して振り返る場を設定する。

(2) 指導の実際

検証授業第3時（展開）の目標は、「教材文『千年の釘にいどむ』から筆者が題名に『いどむ』を入れた理由を考えることを通して、筆者の立場で自分の考えた本のお薦めの内容を見直すことができる。」とし、筆者が題名に込めた思いを読むことで、題名という叙述からお薦めのところが見つかることについて気付くことをねらった。

学習活動	指導上の留意点及び評価
1 本時のめあてを確認する めあて 筆者の立場になって、題名からお薦めのところを見直そう。	○前時を振り返り、自分が見つけた薦める場所にはどんなものがあったか確かめる。
学習課題 筆者は、題名にどうして「いどむ」を使ったのか？	【視点1】言葉への着目・焦点化 教材（題名）の提示を工夫することにより、筆者「内藤誠吾」が「いどむ」という言葉を題名にした理由を課題として意識できるようにする。
2 学習課題について話し合う。 (1) 自分なりの考えをもつ。 (2) 3人組の班で互いの考えを交流する。	【視点2】思考ツールの活用 教材文に書かれていた内容が「いどむ」であったことを確



(3) 班で話し合った考えを全体に紹介し合い、課題に対する考えとして納得できるか検討し合う。



3 学習したことを振り返る

学習課題に対する分かったこと気付いたこと、めあてに対する学習感想を書く。

かめ、「いどむ」を元に文図を用いて考えさせる。

【視点3】話し合いを進めるファシリテーション
班での確かめ合う活動では、全員の意見を促すことや、全員が納得することを目的とすることなど、話し合いの注意点を確認することで交流が深まるようにする。

○学習感想では、最初と授業終了時の自分の考えとを比べ、変容について書かせるようにする。

○話し合いの様子などから学び方についても認め合うようにする。

評価：読む能力（学習シート）

B基準 筆者の立場になって、自分が考えていた「お薦めのところ」が見直せたことを書いている。

B基準に達していない児童への手立て

○板書にまとめた意見から自分の考えと近い考えを選ばせることで、お薦めのところを確かめるようにする。

(3) 検証結果と考察

①「関係形成」について

今回の研究の目的である、「関係形成」を育むことに関し、意識調査の結果を以下に示す。

表2は、質問紙調査において検証授業後の調査結果を示したものである。

表2 質問紙調査結果（N=36）

有意な変容が見られた質問項目	学習前	学習後	有意差
自分の課題を解決するために、積極的に友達に質問している	2.70	2.97	0.01**
クラスみんなは、だれとでも話し合いやグループ活動ができていると思う	3.07	3.50	0.03*

この調査結果から、関係形成について「積極的に質問する」など、課題解決のために言語による意思疎通を行うことについて意識の向上が見られた。このことは、本研究において言語的なコミュニケーションが行われ、関係形成が向上したと捉える。3人組、全体と形態を変えながら交流活動を行った授業場面がその能力を発揮する場面であった。その授業場面が関わっていたと考えられる。

②三つの視点について

課題解決の過程になるよう、視点1「言葉への着目による課題の焦点化」によって豊かなかわり合いのある言語活動を引き出すことにした。その結果、本時においては3人組の交流場面で課題解決を図る

ために「いどむ」をキーワードにし、考えを交流しながら筆者の意図について推論していき、グループでの課題を解決する協働・協調的な学びの姿が見られた。

さらに、単元を貫く言語活動に「ビブリオバトル」というゲーム性を持った活動を設定することにより、児童が意欲的に取り組むことができた。「ビブリオバトル」が持つ言語活動の特徴に「一番読みたくなった本を選ぶ」がある。「一番を選ぶ」ということについては、合意形成を図りながら関係を形成するということが必要不可欠である。関係形成を育む国語科授業の展開について、この言語活動を設定したことは大変効果的であったと考える。

また、視点2を踏まえて実施した「思考ツールの活用」においては、ウェビング図を用いたことにより、どの言葉が筆者の意図に沿うものなのかを協議する姿が見られた。「メタ認知を促す振り返りの視点の提示」については、児童自身が学習課題に対して3人組や学級全体の協議を通して表出された言葉を用い、振り返りの場面で自分の考えを再構築していた。再構築された記述内容をテキストマイニングにより分析すると、図1のように変容が見られ、考えが深まったり、広がったりしたことが分かった。

視点3「学びのUD化」については、3人組の協議する場面において何を目的とした話し合いなのかを明確にして活動に取り組ませるようにした。「3人の考えを一つにまとめる」ということを目的にすることにより、合意形成を目指した関係形成を育む活動として効果的であったと考える。

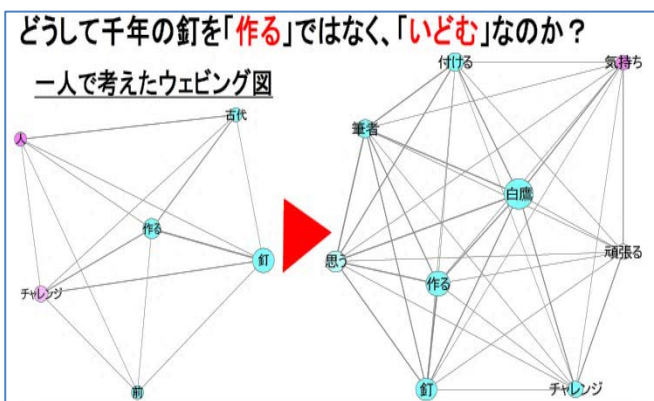


図1 テキストマイニング分析による記述文の変容

検証2 山田小学校第3学年

単元名 「場面のうつりかわりをとらえて、感想をまとめよう」

(1) 本単元の授業設計

① 児童の実態から

本学級の児童は物語文の読み取りに対しての意欲や、登場人物の心情を想像したり、その考えを交流したりすることに意欲が高い集団といえる。本教材においても、登場人物の心情を中心に興味・関心をもって読み深めることが期待される。また、話し合い活動についてもよさや必要性を感じている。学習過程に伝え合う場を積極的に設定し、自分の考えをさらに深め、他者の考えからよりよい考えに到達できるようにすることで、関係形成の姿をより高めることができると思う。

② 学習課題の設定

総合的な学習の時間に行われる祖父母交流学習において、祖父母から戦争時の同年代の子どもたちの様子や思いを聞き、今の生活を振り返るという活動を設定した。その活動の際に、教材文や関連図書についての感想を発表することを課題意識として高める学習過程となるようにした。

③ 単元を貫く言語活動の設定と単元計画

一次導入	二次展開		三次発展
単元のゴールを見通す (内容や表現の工夫が必要か？ 相手・目的・問題は何か？ 祖父母交流会で今の生活との違いを 教えてもらいたい)	教科書教材を中心に登場人物の気持ちを読む。	教科書教材を中心に時代背景について考える。	学んだ国語の力を使って 言語活動(祖父母交流会)を遂行する。
	読むことの学習		
	書くことの学習に生かす	教科書教材の感想文の材料を集める。 教科書教材の感想文を書く。	

祖父母交流会で、今を生きる私たちの思いを伝えよう
並行読書：戦争を題材にした物語

前述①の実態を踏まえ、単元を上記のように構想した。さらに、児童同士が豊かに関わり合えたり、主体的に教科書教材を読むことができたりすることをねらい、単元を貫く言語活動として「戦後70年～今を生きる私たちの思い～」を設定し、その中で発表する感想文を作成するという言語活動を行うようにし、単元計画を以下の表3のように構想した。

表3 本単元の指導計画

次	時	学 習 活 動	【三つの視点】との関連
1	1	○学習課題を設定して学習計画を立てる。	【視点1】 教材文や関連図書の並行読書をし、感想文を書く言語活動を行うという学習過程を設定する。
	2	○題名から物語を想像し、範読を聞いて、あらすじをつかみ、初発の感想を話し合う。	【視点1】 題名に着目することにより、登場人物とその遊びとの関わりを中心に、物語のあらすじを捉えられるようにする。
2	3	○二つの「かげおくり」を比べて話し合う。	【視点2】 思考ツールを活用することで、二つのかげおくりを比較し、自分の考えを整理させるようにする。
	4	○第二場面までのちいちゃんの状況や心情を読む。	【視点3】 心情の根拠となる叙述を、デジタル教科書へのサイドラインの書き込みで示し、考えの共有や練り上げに活用できるようにする。
	5	○第四場面までのちいちゃんの状況や心情を読む。	【視点1】 共通課題「ちいちゃんの願いはかなったのか」を設定し、戦争が奪ったものについて明確に考えをもたせる。
	6	○第五場面を読んで、場面の役割について話し合う。	【視点2】 戦争の時代と今の時代のイメージマップを作成させ、叙述から想像を広げ、整理し、自分の考えの根拠として用いることができるようにする。
3	7	○感想文の書き方を知る。	【視点1】 教材文や関連図書の並行読書から、どのような感想をもったのか明確になるよう文章を構成させる。
	8 9	○感想文を書く。	【視点2】 マインドマップを作成し、項目ごとに言葉を関連付けながら文章構成ができるようにする。
	10	○感想文を読み合って交流する。 ○単元の学習を振り返る。	【視点3】 交流の視点を明確にし、話し合いを進めさせる。

(2) 指導の実際

検証授業第6時(展開)の目標は、「第五場面の役割について、他の場面とのかかわりに注意しながら考え、理由とともに自分の意見を発表することができる。」とし、登場人物の気持ちを想像し、現在の子どもたちと自分たちを重ねながら感想を持つことをねらいとした。

学習活動	指導上の留意点及び評価
1 本時のめあてを確認する。 めあて 第五場面の様子から、感想をもって話し合おう。	○前時までの学習を振り返り物語の大体を確認する。
学習課題 第四場面と第五場面の「きらきらわらう」に違いはあるのだろうか？	
2 学習課題について話し合う。 (1) 第四場面と第五場面を比較する。 (2) 自分の考えをもつ。 ・付箋紙に考えを書く。 (3) グループで互いの考えを交流する。	【視点1】言葉への着目・焦点化 第四場面との比較を行い、共通する表現「きらきらわらう」に着目させる。 【視点2】思考ツールの活用 イメージマップを作成させ、叙述から想像を広げ、整理し、自分の考えの根拠として用いることができるようにする。 【視点3】ICTを活用した学びのUD化 課題の焦点化や思考ツールの使用方法について、電子黒板を用いて提示し、全体で共通理解を図る。
	
・グループでイメージマップを完成させる。	
	
(4) グループで話し合った考えを全体で交流する。	交流の目的を「自分の考えを深めるために友だちの意見を聞いて考えをもつ。」と明確に示し、自分の意見と比較しながら話し合うようにする。
3 学習したことを振り返る (1) 学習課題に対する分かったこと、気付いたこと、めあてに対する学習感想を書く。 (2) 学習感想を伝え合い、次への意欲を高める。	評価：読む能力①（ノート） B基準 第五場面の様子を自分と重ね合わせ、根拠をもとに自分の感想を持つことができる。 〈B基準に達していない児童への手立て〉 ○今の時代の公園の様子をちいちゃんが見たらどう思うかを考えさせる。 ○学習感想では、最初と授業終了時の自分の考えとを比べ、変容について書かせるようにする。 ○単元の学習課題、感想文を書く目的を再度確認し、並行読書への意欲を高める。

(3) 検証結果と考察

①「関係形成」について

表4は、質問紙調査において検証授業後の調査結果を示したものである。

この調査結果から、関係形成について「質問することは、自分の考えをまとめるのに役立っている」において有意差が見られた。このことは、関係形成の姿である「課題解決を図る姿」の一つとして捉えられる。本時においては、付箋を基にイメージマップを作成した場面があった。付箋を分類整理しながら、考えをまとめたことがつながったと考えられる。

表4 質問紙調査結果（N=32）

有意な変容が見られた質問項目	学習前	学習後	有意差
友達に質問することは、自分の考えをまとめるのに役立っている	3.13	3.52	0.01**
話合うことで、分からなかったことがよく分かることがある	3.32	3.68	0.02*
話合いで分かったことは、自分の言葉でまとめることができる	3.05	3.27	0.04*

また、「話合うことで、分からなかったことがよく分かることがある」については、グループでの話合いによりイメージマップを完成させたことや全体での交流をとおして、課題解決に向かったことが有効であったと考えられる。

②三つの視点について

山鹿小学校同様、課題解決の過程になるよう、視点1「言葉への着目による課題の焦点化」によって豊かななかかわり合いのある言語活動を引き出すことにした。その結果、児童は、教材文の二つの場面に同様の表現「きらきらわらう」が書かれていることに気付き、「どうして同じ言葉があるのか」や「違いはあるのだろうか」という疑問を持ち、学習課題へとつなげることができた。そのことにより主体的に課題を解決しようと、グループや全体での協働・協調的な学びの姿が見られた。

また、視点2を踏まえて実施した「思考ツールの活用」においては、付箋をもとに「イメージマップを完成」させた。違いはあるのかについて分類・整理しながら「完成させる」ことを目的に合意形成を図る姿が見られた。「メタ認知を促す振り返りの視点の提示」については、児童自身が学習課題に対して、どのように変わったかについて書かせた。表4の意識調査の結果により、学習をとおして「自分で考えをまとめることができる」という振り返りについて変容が見られた。本時における振り返りでは、『きらきらわらう』の意味が全然違うということが分かりました。」という記述も見られ、話合いを通して考えが深まったり、広がったりしたことが分かった。

視点3「ICT活用」については、視点1の「言葉への着目」場面において、デジタル教科書を電子黒板に示し、実際に教科書拡大文にサイドラインを引かせるなどにより、視覚的に示すことができた。そのことにより、児童に驚きを与えながら言葉への着目につなげることができた。

検証3 山鹿中学校第1学年

単元名 「説明文を比較して、表現の工夫や効果を考えよう」～表現の特徴について自分の考えをもつ～（「流水と私たちの暮らし」）

(1) 本単元の授業設計

① 付けたい力と生徒の実態

本単元は、学習指導要領第1学年読むこと「エ 文章の構成や展開、表現の特徴について、自分の考えをもつこと」を受け、書かれた説明的文章を分析的にとらえ、表現の工夫や効果について自分の考えを形成することを学習する。筆者の意図や思考を想定しながら文章全体の構成を把握するとともに、自分の知識や経験などと関連付けながら、自分の考えを明確にしていくことが重要となる。

そこで、本単元で付けたい力を「説明的文章の表現の特徴を分析的にとらえ、その工夫や効果について自分の考えを持つこと」と設定した。

さらに、生徒の実態として、全国学力・学習状況調査（H25 小学校国語A大問4）を使った事前テストでは、表5のような結果となった。

表5 事前テストの結果（N=34）

項目	正答率	全国平均	比較
①資料に示された情報を正しく読み取ること	80.9%	72.0%	+8.9
②読み取った情報を比較し、的確にまとめること	29.4%	45.1%	-15.7

また、「関係形成」に関する事前調査では、「一人では難しい課題でも、友達と一緒に考えると解決できる」は、82.3%が肯定的に回答していた。しかし、「自分の課題を解決するために、積極的に友達に質問している」は、47.1%にとどまった。

② 学習課題の設定

このような実態を踏まえ、説明的な文章の表現の工夫や効果について、主体的に理解し、協働的に解決するための手立てが必要と考えた。そこで、小学校で学習した既習の説明的文章と本教材の共通する表現を見つけ、その工夫や効果について説明するという学習課題を設定した。

③ 単元を貫く言語活動の設定と指導計画

これらを受け、単元を貫く言語活動を「二つの説明文を比較して、表現の工夫や効果を考えよう」と設定し、指導計画を以下の表6のように構想した。

表6 本単元の指導計画

言語活動	単元を貫く	次時	○学習活動と【三つの視点】の関連
二つの説明的文章を比較して、表現の工夫や効果を考えよう		第1次 1時	○単元を貫く言語活動を理解し、学習の見通しを持つ。 【視点1】指導事項の明確化と単元を貫く言語活動の理解
		第2次 2・3時	○文章の内容を読み取り、キーワードを用いて要点をまとめる。 【視点1】言葉への着目による課題の焦点化 【視点2】思考ツールの活用 【視点3】効果的なICTの活用
		4時	○要点をもとに、文章全体を要約する。 ○筆者の文章表現の特徴をまとめる。 【視点1】対話型言語スキルの活用 【視点2】メタ認知を促す振り返りの工夫
		第3次 5時（本時）	○別の説明文を読み、文章の書き方で共通していることをとらえ、その効果を考える。 【視点1】対話型言語スキルの活用 【視点2】メタ認知を促す振り返りの工夫

(2) 指導の実践

学習活動	指導上の留意点
1 課題を確認する。	○前時の既習事項を活用させる。
《課題》二つの説明文に共通している書き方を見つけ、その工夫や効果を考えよう。	
2 共通している書き方の効果を考える。 《見つける観点》 ・論の構成の仕方 ・事実と意見の関係 ・図表等の使い方 ・文章や数値の引用 ・文末表現の言葉	○自分の知識や経験と重ねながら読むことを伝える。
3 班で交流する。	【視点1】対話型言語スキルの活用 ・みなさんはどうですか？ ・それはつまり、…ということですか？ ・例えば、何ですか？ ・思いついたのですが…。 ・みんなの意見をまとめると、…。
4 全体で確認する。	
5 学びを振り返る。	【視点2】メタ認知を促す振り返りの工夫 ○3つの視点で振り返らせる。 ①授業で身に付いたこと ②友達から学んだこと ③さらに学習したいこと

(3) 検証結果と考察

① 付けたい力の定着状況

全国学力・学習状況調査(H27 中学校国語A大問4)を使った事後テストでは、表7に示す結果となり、本単元において付けたい力の向上が見られた。

表7 事後テストの結果(N=34)

項目	正答率	全国平均	比較
読み取った情報をもとに自分の考えをまとめること	61.8%	68.9%	-7.1

② 「関係形成」について

「関係形成」に関するアンケートの結果は、図2に示す結果となった。

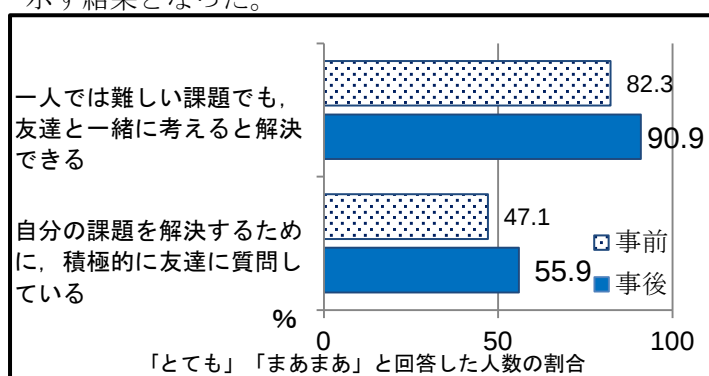


図2 「関係形成」に関するアンケート結果

また、授業後の自由記述のアンケートでは、次のような記述が見られた。

班で自分の考えを言ったり、説明したりすることで、自分の意見が正しいかどうかを教えてもらえるので、発表するときに自信が付く。

自分一人で考えても、一つの考えを出してしまったらなかなかそれが変わることはないけど、班や全員で考えると別の見方や考え方に気付いて、とても勉強になることが多かったです。

③ 3つの視点について

視点1「単元を貫く言語活動の設定」については、学ぶ必然性がある学習課題の設定が重要であり、生徒が主体的に選択できる複数の課題がある方が、課題解決の関係形成力の向上につながるのではないかと考える。

また、視点2「振り返りの視点の提示」では、「友達から学んだこと」の視点を明確にし、その項目に関する記述を分析することで、関係形成の促進要因や阻害要因が明確になると考える。

さらに、視点3「学びのUD化」では、関係形成に向けた教師の細かい支援が不可欠であると考え。

検証4 玉名中学校第2学年

単元名 「君は『〇〇』を知っているか を書こう」
～評論の表現の工夫について考える～
(「君は『最後の晩餐』を知っているか」)

(1) 本単元の授業設計

① 付けたい力と生徒の実態

本単元は、学習指導要領第2学年読むこと「ウ 文章の構成や展開、表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをまとめること」を受け、評論の文章を読み、そこに表された書き手の目的や意図について考えることを学習する。その際、自分の考えを支える根拠となる部分を明確にすることが重要となる。また、評論特有の表現の仕方が持つ効果について考えることも必要である。

そこで、本単元で付けたい力を「評論の文章の表現の特徴をとらえ、その効果について、根拠を明確にして自分の考えをまとめること」と設定した。

さらに、生徒の実態として、全国学力・学習状況調査(H27 中学校国語A大問6)を使った事前テストでは、表8のような結果となった。

表8 事前テストの結果(N=35)

項目	正答率	全国平均	比較
①目的に応じて、要旨をとらえる。	50.0%	71.3%	-21.3
②文章の表現の特徴をとらえる。	65.9%	87.1%	-21.2

また、「関係形成」に関する事前調査では、「一人では難しい課題でも、友達と一緒に考えると解決できる」は、42.9%が肯定的に回答していた。しかし、「自分の課題を解決するために、積極的に友達に質問している」は、28.6%にとどまった。

② 学習課題の設定

このような実態を踏まえ、評論の文章の表現の工夫や効果について、主体的に理解し、協働的に解決するための手立てが必要と考えた。そこで、本単元で評論分の特徴を学び、それを活用して、実際に自分の好きな事柄について評論としてまとめるという学習課題を設定した。

③ 単元を貫く言語活動の設定と指導計画

これらを受け、単元を貫く言語活動を「君は『〇〇』を知っているか を書こう」と設定し、指導計画を以下の表9のように構想した。

表9 本単元の指導計画

言語活動	次	時	○学習活動と【三つの視点】の関連
「君は『○○』を知っているかを書いて」	第一次	1時	○単元を貫く言語活動を理解し、学習の見通しを持つ。 【視点1】指導事項の明確化と単元を貫く言語活動の理解
		2・3時	○文章の内容を読み取り、筆者が『かっこいい』と思った根拠を明確にし、まとめる。 【視点1】言葉への着目による課題の焦点化 【視点2】思考ツールの活用 【視点3】効果的な ICT の活用
	第二次	4時	○筆者の文章表現の特徴についてまとめる。 ○意見を交流し、自分の考えをまとめる。 【視点1】対話型言語スキルの活用 【視点2】メタ認知を促す振り返りの工夫
		5時(本時)	○各自が書いた評論文を読みあい、観点を明確にして交流することで、それぞれの表現の工夫をとらえ、その効果を考える。 【視点1】対話型言語スキルの活用 【視点2】メタ認知を促す振り返りの工夫

(2) 指導の実際

学習活動	指導上の留意点
1 課題を確認する。 《課題》「君は『○○』を知っているか」をグループで読み合い、観点をもとに感想を交流しよう。	○前時の既習事項を活用させる。
2 評論文を読みあい、コメントを書く。 《表現の工夫の観点》 ・論の展開の仕方 ・接続語や問いかけ ・比喩、体言止め ・「」でくくる ・文末表現の言葉	○根拠を明確にして、自分の考えを記述させる。 【視点3】効果的な ICT の活用 
3 班で交流する。 ・自分の工夫を発表 ・互いに意見を交流	【視点1】対話型言語スキルの活用 みなさんはどうですか？ ・それはつまり、…ということですか？ ・例えば、何ですか？ ・思いついたのですが…。 ・みんなの意見をまとめると、…。
4 学びを振り返る。 ・他の評論を紹介し、読書活動の推進を図る。	【視点2】メタ認知を促す振り返りの工夫 ○3つの視点で振り返らせる。 ①授業で身に付いたこと ②友達から学んだこと ③さらに学習したいこと

(3) 検証結果と考察

① 付けたい力の定着状況

全国学力・学習状況調査(H26 中学校国語A大問7)を使った事後テストでは、表10に示す結果となり、本単元において付けたい力の向上が見られた。

表10 事後テストの結果(N=35)

項目	正答率	全国平均	比較
多様な方法で材料を集め、自分の考えをまとめる	72.7%	84.6%	-11.9
文章の構成についての自分の考えを広げる	68.2%	72.7%	-3.9

② 「関係形成」について

「関係形成」に関するアンケートの結果は、図3に示す結果となった。

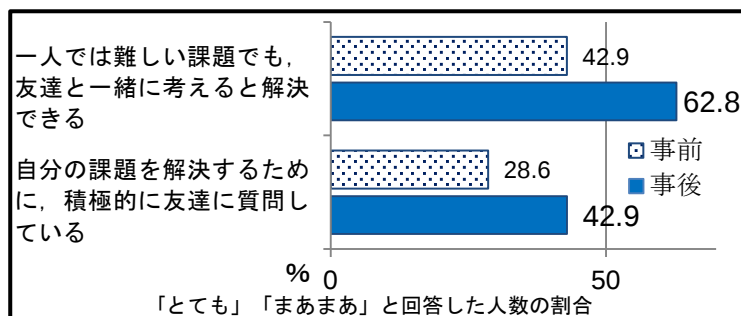


図3 「関係形成」に関するアンケート結果

また、授業後の自由記述のアンケートでは、次のような記述が見られた。

自分とは違う考えをもっている人の意見を聞くと、そのことについて、より深く考えることができたのでよかった。

今回の班活動で班の絆が深まったと思うし、この発表会ができて本当によかったと心から思う。特に、みんなから自分の評論文が「すごい」と言ってもらえて嬉しかった。

③ 3つの視点について

視点1「豊かなかかわり合いのある言語活動」については、協働的に学ぶための「対話型言語スキル」の育成が不可欠であり、それを身に付けることが関係形成の基盤になると考える。

また、視点2「思考過程の可視化」では、一定の観点到に沿ってお互いの考えの根拠を話し合うことが重要であると考え。それにより、互いの思考の共通点や相違点が明確になり、その後の合意形成や課題解決の関係形成がスムーズに進むと考えられるからである。

検証5 鹿本高等学校第2学年

題材名 評論『『である』ことと『する』こと』

(1) 本題材の授業設計

① 付けたい力と生徒の実態

現代文Bの内容(1)ア読むことに関する指導事項を踏まえ、本題材の目標を「文章の構成や展開、要旨を的確にとらえ、表現の妥当性について自分の考えを述べる」と設定した。

指導事項を基に質問紙を作成し、意識調査を実施した。調査結果から、要旨や題材、材料など、文章の内容を捉えながら読んでいる生徒は65%を超えるが、構成や展開について注意しながら読んでいる生徒は5割強、また、考察や評価をしながら主体的に読んでいる生徒は4割強であることが分かった。さらに、自分の考えを表現することに関し、情報の収集や選択、資料の作成についてはそれぞれ6割～7割の生徒が「できる」と答えたが、資料の活用や論拠の明示など、分かりやすく表現することについて「できる」と答えた生徒は半数に満たなかった。

そこで、題材の指導計画においては、生徒たちが文章構成や論理展開にも意識を向け、根拠を示して自分の考えを表現するような場面を位置付けようと考えた。

② 学習課題の設定

①で述べた目標及び生徒の実態に基づいて「筆者が付けた小見出しの妥当性について、自分の考えを述べよう」という、題材全体を通した学習課題を設定し、「本文には、どんな小見出しがふさわしいだろうか」という問いを立てた。

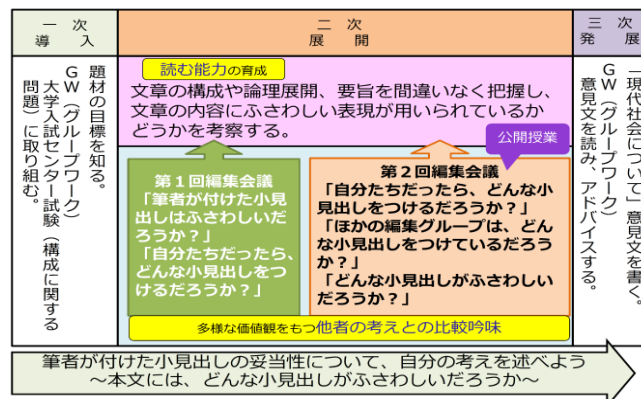
この学習課題を解決する過程では、文章の要旨はもちろんのこと、文章構成や論理展開も的確に捉えなければならないという必要性に、生徒自身が気付くであろうと期待できる。また、この学習課題についてグループで検討する場を設けることで、生徒が自分の考えを分かりやすく表現する必然性が生じると考えた。

グループ活動においては、回を重ねるごとに話し合う形態や内容がレベルアップするように課題を設定し、段階的な課題解決になることをねらった。

③ 題材全体を通した言語活動の設定と指導計画

題材全体を通した言語活動として、グループ活動

による「編集会議」を設定し、題材の指導の流れを以下のように構想した。



「編集会議」では、生徒の考えの再確認や広がり、深まりをねらいとする。また、この言語活動を通して「伝え合う力」の向上を図り、併せて、合意形成・課題解決を図ることのできる人間関係の形成に取り組もうとする意欲や態度の育成も目指す。

題材の指導計画における学習活動と本研究における三つの視点との関連は表11のとおりである。

表11 題材の指導計画

次 時	学 習 活 動	【三つの視点】との関連
1 1	○グループで、大学入試センター試験の構成に関する問題に取り組む。 ○グループ・ワークの振り返りを行う。 ○題材の目標を知る。	【視点2】グループ・ワークを振り返らせるために、「振り返りシート」を記入させる。
2 2 8	○第1節から第6節まで、具体例と筆者の意見との関係に注意しながら読む。 ○「である」ことと「する」こと、それぞれの論理と価値について考える。 ○各節の小見出しについて考える。	【視点1】文章構成や論理展開、要旨をとらえさせるために、小見出しに着目させる。
2 9 (本時)	○第6節の小見出しについて検討する。	【視点1】小見出しの比較・検討に向け、課題意識を持たせるために、はじめに自分たちで小見出しを作成させる。 【視点2】ワークシートや振り返りシートを用いて本時の学習のメタ認知を促す。 【視点3】グループ活動の流れや留意点がわかり、いつでも見直せるよう、各グループにプリントを配布する。
1 0 5 1 1	○第7節から第9節まで、具体例やたとえについて考え、筆者の主張を読み取る。 ○各節の小見出しについて考え、全ての小見出しの関係性について考察する。	【視点2】これまでの小見出し検討の方法や視点を踏まえさせる。

3	1 2	○文章の要旨を踏まえ、現代社会についての自分の考えを書く。	【視点2】本題材の学習を通して学んだことをもとに、自分の考えを書かせる。
---	--------	-------------------------------	--------------------------------------

(2) 指導の実際

検証授業第9時（展開）の目標は、「複数の小見出しについて比較・検討し、その妥当性について自分の考えを述べる。」とし、筆者の付けた小見出しと生徒たち自身が考えた小見出しを比較・検討することにより、筆者の表現の妥当性を評価する力を付けたいと考えた。

学習活動	指導上の留意点及び評価
1 本時の課題と学習の流れを確認する。 学習課題 第6節の小見出しをグループで考え、他のグループが考えた小見出しや筆者が付けた小見出しと比較してみよう ～どんな小見出しがふさわしいだろう～	○本時までに取り組んだグループ・ワークを振り返らせ、本時の学習課題の意識付けをする。
2 第6節の小見出しを考える。 (1) 自分なりの考えを持つ。 (2) 3人グループで互いの考えを交流し、小見出しを作成する。	【視点1】小見出しの比較・検討に向け、課題意識を持たせるために、はじめに自分たちで小見出しを作成させる。 【視点3】グループ活動の流れや留意点に分かり、いつでも見直せるよう、各グループにプリントを配布する。 【視点2】ワークシートを用いて、自分の考え、グループの考えとその理由等を明確にさせる。
3 他グループと交流し、自分たちが考えた小見出しについての説明や、他グループが考えた小見出しについての情報収集を行う。	○【役割分担】Aさん・自分たちが考えた小見出しについて説明する。B・Cさん・それぞれ他グループに移動し、情報をメモして戻る。
4 自分たちが考えた小見出し、他グループが考えた小見出し、筆者が付けた小見出しの比較・検討を行う。 (1) 複数の小見出しを比較・検討する。 【言語活動】（設定の意図）小見出しを比較・検討させることで、生徒の思考力・判断力・表現力等を育てる。 (2) グループでの検討内容について、全体で発表する。	評価：読む能力①（行動の観察・記述の点検） B基準 第6節の小見出しを検討し、第6節の内容にふさわしい表現が用いられているかどうかを考察している。 A基準 B基準に加え、考察の際に他の節との関係性にまで言及している。 〈B基準に達していない児童（生徒）への手立て〉 これまでにまとめたノート等を考える際の手掛かりとさせるなどの手立てを、個に応じで行う。
5 本時の学習を振り返る。 (1) グループでの比較・検討を通して、考えたこと、気付いたことを書く。	【視点2】振り返りシートを用いて本時の学習のメタ認知を促す。



(3) 検証結果と考察

① 付けたい力の定着状況

「文章の構成や展開、要旨を的確にとらえ、表現の妥当性について自分の考えを述べる」という本題材の目標に関して、未習教材で作成した事前テスト（10月実施）と、別の未習教材で作成した事後テスト（12月実施）とによって比較することとした（図4）。問題と評価基準は表12のとおりである。

表12 事前テスト及び事後テストの問題

問題	本文の構成や展開について、あなたの考えを述べなさい。
評価基準	4 考えを述べるにあたって、根拠の明確さ、構成の工夫の両方を満たしている。 3 考えを述べるにあたって、根拠の明確さ、構成の工夫のどちらか一方は満たしているが、もう一方が不足している。 2 考えを述べているが、根拠の明確さ、構成の工夫のどちらも不足している。 1 記述なし、または問いに対する答えになっていない。

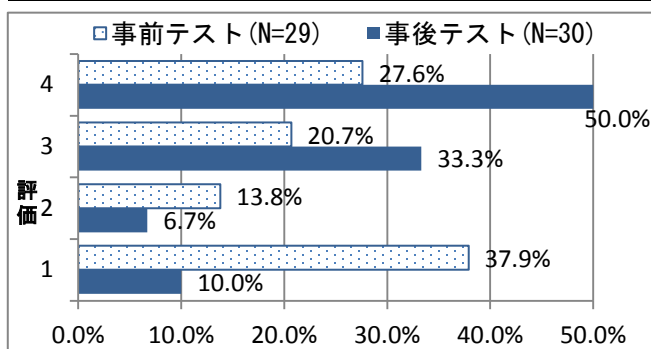


図4 事前テスト及び事後テストの結果比較

事前テストでは半数に満たなかった評価4及び評価3の生徒数に伸びが見られ、約8割の生徒が自分の考えを述べることができた。一方、評価1の生徒の内訳は記述なしが1人、記述が途中で終わっている様子から時間不足だったと思われる生徒が2人だった。

また、質問紙による意識調査において課題だと考えられた項目についての結果比較を、以下に示す。

上段：事前調査 29人
下段：事後調査 27人

質問	「とてもそう思う」＋「そう思う」の割合 (%)
8 評論を読むとき、構成や展開に関して、個々の段落に注意してそれぞれの段落のはたらきを確認め、段落相互の関係を読み取っている。	51.72 59.26
9 評論を読むとき、内容に関して、中心となる主要な論点と、具体例、説明、補足、反証などを述べる従属的な論点とを読み分けている。	55.17 66.67
11 評論を読むとき、考えの筋道の通し方（構成や展開の仕方、構成や展開が要旨などを伝えるために果たしている効果など）を分析、考察し、評価しながら読んでいる。	41.38 55.56
15 自分の考えを表現するとき、収集した情報や作成した資料を活用し、論拠を明示するなどしてわかりやすく表現することができる。	48.28 66.67

これらの結果から、引き続き支援が必要な生徒もいるが、要旨だけでなく構成や展開にも意識を向けて文章を読み、自分の考えを表現する力の育成には、今回のような協働・協調的な学びを位置付けた授業は有効だと考えられる。

② 「関係形成」について

今回の研究の目的である、協働・協調的な学びを通して児童生徒の関係形成を育むことに関し、意識調査の結果を以下に示す。

上段:事前調査 30人 下段:事後調査 29人			
質 問		「とてもそう思う」 「そう思う」の割合(%)	
20	友だちと学び合うとき、伝えたいことをうまく伝えることができる。	73.33	
		79.31	
21	友だちと学び合うとき、自分の考えの間違いに気付いて正しい考えに直すことができる。	100.00	
		96.55	
22	友だちと学び合うとき、自分の考えと友だちの考えを比べて、いろいろな考えのよさに気付くことができる。	96.67	
		100.00	
23	友だちと学び合うとき、友だちの考えを聞いて、組み立てていた自分の考えをもう一度組み立て直すことができる。	90.00	
		93.10	
24	友だちと学び合うとき、自分の考えや友だちの考えをつなぎ合わせながら、新しい考えを創り出すことができる。	90.00	
		82.76	

また、授業後に、記述によるアンケートを実施した（回答者 28 人）。グループ活動のプラス面として「自分では考えつかないことに気付ける（8人）」「いろいろな意見が聞ける（7人）」「より自由な発想や新しい考えができる、考えが深まる（5人）」「自分の意見に賛同してくれる（5人）」などの意見が挙げられた。一方、マイナス面としては「意見が合わない、異なる意見をまとめるときが大変（7人）」「自分の考えが合っているのか不安（4人）」「自分の考えが浮かばない、人に頼ってしまう（3人）」などが挙げられた。

これらのことから、様々な意見を述べ合うことができるような関係形成は成立しているものの、正しい考えに修正したり新たな考えを創造したりするために、異なる意見をまとめていくような合意形成や課題解決ができる関係形成にまでは至っていないと言える。

③ 三つの視点について

関係形成に関わる課題について生徒たち自身が実感できたという点では、視点1「言葉への着目による課題の焦点化」によって豊かなかわり合いのある言語活動を実施したことが有効であったと考えられる。

また、視点2を踏まえて実施した「メタ認知を促す振り返りの視点の提示」も、生徒自身が学習課題の解決やグループ活動において自分の果たした役割を振り返るのに有効な手立てであったと考える。

振り返りシートには「グループワークで、みんなの意見を聞く中で、自分もどこに目を付けて読むべきなのかを理解できるようになった。そして、自分の意見も以前より理由も含めて言えるようになった」「文章中のキーワードを探したり、話し合うことで、考えを深めていくことができた」「最初は自分の意見が間違っているかもしれないからと、しっかり出せずにいたが、グループワークを繰り返す中で意見を述べるできるようになった」「最初のグループワークでは何をしたらいいのか分からなくて班の役に立てていなかったけど、今日は少しは役に立てたので良かった」などの振り返りが見られた。

視点3「学びのUD化」については、グループ活動において自分たちが何をするのか、何を考えるのかを生徒がいつでも確認できるよう、学習過程を明示するために「編集長からの指示書」を用意した。この「指示書」は、グループメンバーによる課題の共有を促して円滑にグループ活動に移れるようにした点、いつでも誰でもすぐに学習の流れを確認できるようにした点など、生徒に安心して学習に取り組める環境を提供する手立てとして効果的であったと考える。

「関係形成」という、21世紀に求められる資質・能力は、国語科の目標の中にある「伝え合う力」との関連性が強いと考えられる。今回、「関係形成」を育むことに焦点を当て、三つの視点を踏まえて協働・協調的な学びの場を位置付けた授業づくりに取り組んだことで、国語科の目標の達成につながる成果が得られたという手応えを感じることができた。

4 研究のまとめ

今回、関係形成を育む国語科学習の展開を目指し、検証授業を行った。研究の視点1「学びを引き出す」における課題意識を高めることについては、各検証授業による児童生徒の姿から、「言葉への着目・焦点化」ことは有効であることが分かった。「単元を貫く言語活動の設定」については、各検証授業において、単元における本時の位置付けについて授業者

が児童生徒に意識させることにより課題意識を継続させることができた。

視点2「学びを振り返る」について、振り返る際の手立てとして、思考ツールを活用することで思考過程が可視化できるようにした。小学校ではウェビング図やイメージマップを用い、考えを持ったり交流したりする場面で活用し、授業の終末でそれらを基に考えを再構築させた。中学校、高等学校では、最初の考えと授業終末とで考えを分けて書くワークシートの工夫を行った。これらの取組により、授業の最初と最後とで児童生徒の考えたことが残ることは、自分の考えの変容を見取ることにつながり、学びを振り返るのに有効であった。

視点3「学びを支える」におけるファシリテーターの役割を意識させて話し合い等の交流を行うようにすることについては、交流の目的や方法を知らせた後に話し合いをするようにしたことで、目的意識を持って活動する姿が見られた。

これらの取組による成果を基に「関係形成を育む国語科学習」を見直した。単元を貫く言語活動において「ビブリオバトル」や「自分の考えを述べよう」という合意形成・課題解決の姿を目指した言語活動が行われている。また、本時においても「考えを一つにまとめる」や「感想を交流する」「編集者になってふさわしい小見出しを決める」という言語活動が行われている。これらの言語活動に共通するのは、グループや全体における「協働・協調的な学び」の姿である。「関係形成」を育むことを目指した言語活動では、国語科における「伝え合う力」と関連した児童生徒の協働・協調的な学習が必要不可欠であることが分かった。

ただ、課題として、協働・協調的な学びのためには「何を」「どのように」「どうする」が明確になっていないと、児童生徒が目的意識を持てずに活動しがちになることも分かった。「何を」ということが明確になる授業展開が素地となると考えられるので、国語科における教材から分かる「何を」に当たることにつかめる学習展開についても今後検証を図る必要がある。また、「どのように」「どうする」が明確になるような学習課題の設定も重要となる。それらについても検証を図っていきたい。

《引用・参考文献》

文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説国語編』『中学校学習指導要領解説国語編』（2010）『高等学校学習指導要領解説国語編』
谷口忠大監修（2014）「ビブリオバトルを楽しもう」さ・え・ら書院
国立教育政策研究所（2015）資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する研究報告書1